



海から海を学ぶ 06

「ウォータークラフトとウォーターマン」

著者 内田 正洋

英語には船舶や舟艇を意味するウォータークラフトなる語があり、単にクラフトと言う場合もある。日本ではほとんど使われていない言い方だけど、最近よく話題になるウォータージェット推進で走る水上バイクなるものは、2輪車でもないのにバイクと呼んでいるけど、英語ではPWCと呼ぶ。パーソナルウォータークラフトの略称である。

ウォータークラフトは、日本語にすると「水上具」といった感じだろうか。主に小さな舟のことを意味しており、カヌーもまたウォータークラフトである。ちなみに舟と書くと、小さな舟で、艇も小舟だ。船の総称として使う船舶の舶は「つむ、おおぶね」とも読み、大きな船のこと。さらに、船でも船の総体を意味する感覚があるし、艦となると「いくさぶね」となる。

そして、船に乗る人はシーマンと呼び、シーマンになるにはシーマンシップなるものが重要だ。船乗りの心構えや、船員の倫理観とか、時には操船術を意味したりもする。シーマンシップを理解する上で大正時代に作られた標語のようなものがある。

「スマートで目先が利いて几帳面負けじ魂これぞ船乗り」というもの。日本で船乗りになろうとする者には必ず教えられていた。多分、今もそうだ。

カヌー乗りも船乗りではあるけれど、なにしろ手漕ぎのウォータークラフトだからして、いわゆるシーマンとは、どこか一線を画すようなところがある。船乗りよりもっと水面に近いし、カヌーには乗り込むというより、一体化するような感覚が求められる。

シーカヤックなどは、まさに下半身がシーカヤックになり、身体と一体化してしまい、あたかも海上を自由に移動できる海洋ほ乳類になったかのような感覚になっていく。ウォータークラフトと一体化することで人はウォーターマンになる、といった言い方さえある。ウォーターマンとは、船頭や水夫、漕ぎ手といった意味があり、サーファーたちもウォーターマンと呼ばれているのだけど、このウォーターマンという言い方もあまり日本では馴染みがない。まあ手漕ぎで舟を操る人は、今の日本にはほとんどいなくなってしまったからだろうな。でも、サーファーたちは誇りと共にウォーターマンをリスペクトしている。

ウォーターマンだからして「水人」となるけど、人は水中には長く滞在できないから「水上人」とした方がいいかもしれんな。海の場合だと「海人」となり沖縄では「ウミンチュ」とか「ウミアッチャー（海を歩く人）」といった人たちである。前述した「水夫」は「すいふ」と読むが「かこ」とも読む。漕ぎ手も水夫である。日本の場合の水上人は、その多くが海で活動しているからウォーターマンは海人としてもいいだろう。歴史学的には「海民」とする場合も多い。

で、こういったウォーターマンや海人は、どういった人たちかという、かつては漁村や海村に暮らし、海に依存し、海と共に生きていた人たちだったけど、漁村や海村自体がなくなりつつある今は、意味が変わってきている。今のウォーターマンは、海をこよなく愛している人たちである。海と一体化しているような生き方をし、ウォーターマンシップを身に付けている。この何々シップというのはシェイプが語源であり、見るからにそんな風情や風体をしている人のこと。見るからに海人然としている。それがウォーターマンである。

そして、今のウォーターマンは、海の問題に非常に敏感な人たちである。海の問題を憂い、海の問題を解決しようと活動している人たちである。ただレジャーのために海へ行く人たちではないし、海を仕事場にしている人たちだけでもない。という話はあまり知られていない。